

# 郷 蔵 地 遺 跡

—塩川ダム建設に伴う発掘調査報告—

1987.3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

ごう ぞう ち  
郷 蔵 地 遺 跡

—塩川ダム建設に伴う発掘調査報告—

1987. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

## 序

本報告書は、塩川ダム建設に伴う県道付替工事に先立ち、1986年秋に実施した郷藏地遺跡の発掘調査の結果をまとめたもので、水没する旧道に代わって新道がこの地を通過することになります。

遺跡の所在する山梨県北巨摩郡須玉町比志は、釜無川の一支流塩川を、韮崎市内の合流点から遡ること約20kmの地に位置する山間の集落です。周辺には縄文時代の遺跡が数か所知られていますが、戦国期には甲府から信州佐久方面に通ずる道路上の要地であり、火急の際に軍用通信機関として重要な機能を果たした烽火台の跡なども残っております。

遺跡は比志の集落を外れた河岸段丘に接する台地上にありますが、発掘調査の結果、遺構として縄文時代中期後半の敷石住居址1基が検出され、住居址内から深鉢形土器などの一般土器のほか、三角墳形土製品・石棒・丸石など祭祀的性格の極めて強い遺物が発見されました。また調査区全域から同じ時代の土器が多数出土いたしました。

遺跡の規模はさして大きくなく、出土品も特に大量というほどではありませんが、遺構が比較的珍しい敷石住居址であり、遺物に県内では類例の少ない三角墳形土製品が含まれていることなど、見るべき成果があり、その上、塩川水系の遺跡としては初めての発掘調査であった点にも意義があります。本報告書が、多くの方々に研究の資料としてご活用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご支援・ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 磯貝正義

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和61年度に山梨県土木部から委託されて山梨県教育委員会が実施した、北巨摩郡須玉町に所在する郷蔵地遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、出土品等の整理及び報告書の作成は田代 孝が担当した。
3. 本報告書の編集、執筆は田代 孝が行った。
4. 写真撮影は、遺構・遺物とともに田代 孝が行った。
5. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 出土品整理参加者  
石田文次郎、石川 操、長田久美子、桜井幸子、桜井里子、内藤真千子、松野和美、若尾 悅子
7. 発掘調査にあたって、大門・塩川ダム建設事務所、須玉町教育委員会・須玉町役場塩川支所ならびに比志地区のみなさんにご協力を賜わった。

## 目 次

第 I 章	調査の実施と経過	1
	第 1 節 調査に至る経過	1
	第 2 節 調査組織	1
第 II 章	遺跡概況	2
	第 1 節 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
	第 2 節 遺跡の地形について	2
第 III 章	遺構と遺物	5
	第 1 節 住居址と遺物	5
	第 2 節 敷石状遺構	14
	第 3 節 遺構外出土の遺物	15
	第 4 節 遺跡出土の石について	26
第 IV 章	まとめ	27
	第 1 節 敷石住居について	27
	第 2 節 丸石について	28
	第 3 節 石棒について	29
	第 4 節 三角墻形土製品について	30

## 挿図目次

第1図	郷藏地遺跡位置図	3
第2図	郷藏地遺跡地形図	4
第3図	1号住居址平面図	6
第4図	1号住居址遺物出土状況	7
第5図	1号住居址出土土器実測図	8
第6図	1号住居址出土土器拓影(1)	9
第7図	1号住居址出土土器拓影(2)	10
第8図	1号住居址出土石器実測図(1)	12
第9図	1号住居址出土石器実測図(2)	13
第10図	敷石状遺構平面図	14
第11図	遺構外出土の土器実測図	16
第12図	遺構外出土の土器拓影(1)	17
第13図	遺構外出土の土器拓影(2)	18
第14図	遺構外出土の土器拓影(3)	19
第15図	遺構外出土の土器拓影(4)	20
第16図	遺構外出土の土器拓影(5)	21
第17図	遺構外出土の土器拓影(6)	22
第18図	遺構外出土の石器実測図(1)	24
第19図	遺構外出土の石器実測図(2)	25

## 表目次

第1表	郷藏地遺跡の岩石名	26
-----	-----------	----

## 図版目次

- 図版 1 遺跡遠景、遺跡近景
- 図版 2 調査区、発掘調査
- 図版 3 遺跡全景、調査風景
- 図版 4 敷石状遺構、敷石状遺構と丸石
- 図版 5 石棒出土状態、住居地内遺物出土状態
- 図版 6 遺物出土状態、住居址張出部
- 図版 7 住居址全景(1)、(2)
- 図版 8 住居址全景(3)、住居址掘り方
- 図版 9 住居址内出土土器(1)、(2)
- 図版10 住居址内出土器(3)、(4)
- 図版11 住居址内出土石器
- 図版12 遺構外出土土器(1)、(2)
- 図版13 遺構外出土土器(3)、(4)
- 図版14 遺構外出土土器(5)、(6)
- 図版15 遺構外出土土器と石器
- 図版16 遺構外出土石器(1)、(2)
- 図版17 石材(1)
- 図版18 石材(2)

# 第Ⅰ章 調査の実施と経過

## 第1節 調査に至る経過

- 昭和61年9月3日 文化庁に発掘通知を提出する。
- 昭和61年10月1日 調査を開始する。
- 昭和61年11月22日 調査を終了する。
- 昭和61年11月28日 荘崎警察署に埋蔵文化財の発見通知を提出する。

## 第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査担当者 田代 孝（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

調査参加者 深沢裕三、津金義尚、比志武樹、比志治敏、植松茂直、丸山幸男、丸山 孝、  
植松政直、丸山正文、日向七典、比志昭子、丸山かつえ、清水増子、小林節子、  
小沢幸子、碓井かつえ、八巻志げ子、日向君子、比志嘉三、鷹左右久恵、日向  
利公  
(順不同)

## 第Ⅱ章 遺跡概況

### 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

郷蔵地遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町比志字坂下3038-2番地を主体とする地域である。字名が坂下となっているが、1972年度の山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査によれば、付近一帯を郷蔵地遺跡として、すでに報告されていることからも、その遺跡名で呼んでおきたい。

郷蔵地遺跡は、塩川の上流域にあたる比志地内にある。塩川は釜無川の1支流であり、須玉町に隣接する韮崎市内で釜無川に合流しているが、ここを起点に上流へ約20kmの距離に比志の集落がある。周囲は山がせまり深い谷間を形成しているが、比志の地区は谷幅も広がり、河床も上がっている。遺跡は集落を外れた河岸段丘に接する台地上にある。

塩川水系における遺跡の分布は、多くが発達した河岸段丘上やこれらに接する山裾の台地上にある。郷蔵地遺跡周辺には、対岸にあたる位置に馬込遺跡があり、縄文土器の散布地となっている。大渡地区には浜井堀遺跡があり、縄文土器や黒曜石の散布が報告されている。また櫻山地区には四辻遺跡、櫻山遺跡があり、漆戸地区には押出遺跡などがある。

さらに大渡の烽火台、比志の烽火台、前の山の烽火台などが知られており、戦国期の甲信国境の防備や連絡網を示す中世城郭が存在している。

### 第2節 遺跡の地形について

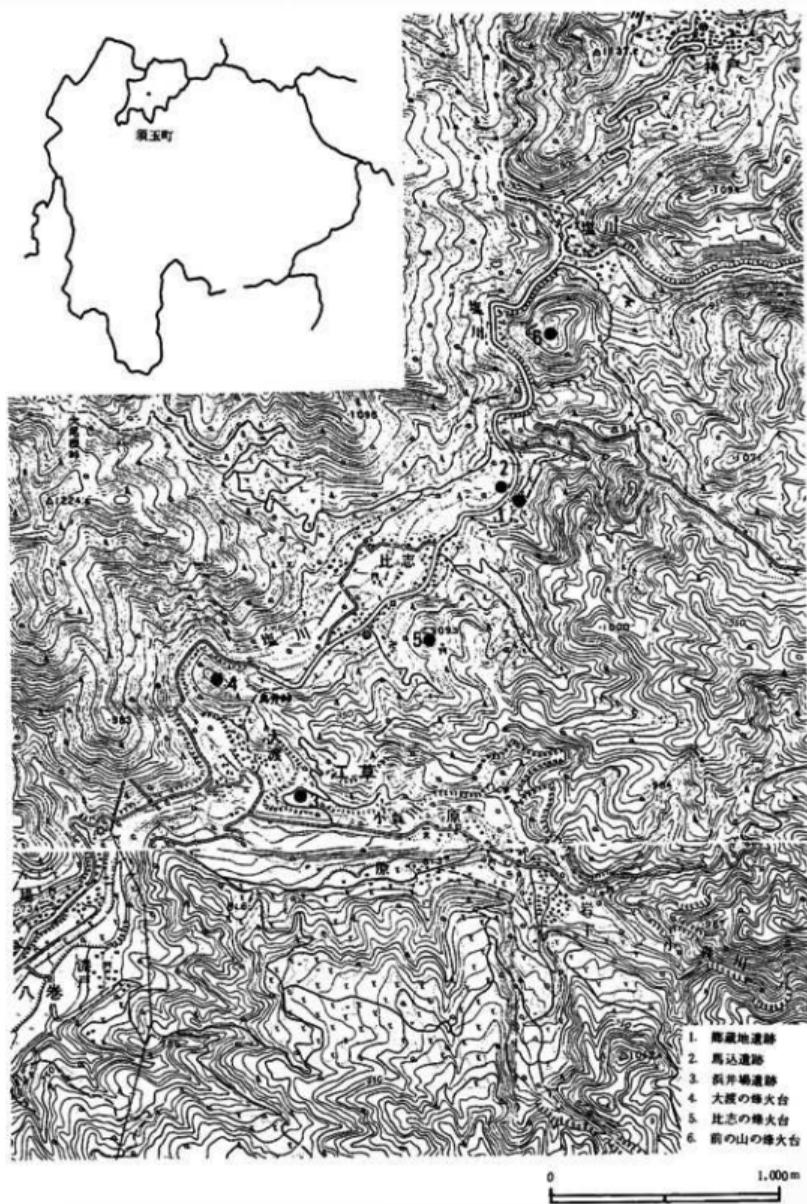
郷蔵地遺跡は、比志の集落を抜けて塩川沿いに県道若神子・増富線を塩川へ向かうと、すぐ右手に台地が見える。塩川の河岸段丘上を走る県道に接した小台地上である。

台地へは県道から分かれて旧道を上がって行く。現在、旧道は農道として利用されている程度であるが、塩川ダム建設に伴う県道の付替え工事はこの旧道に沿って行われることになる。

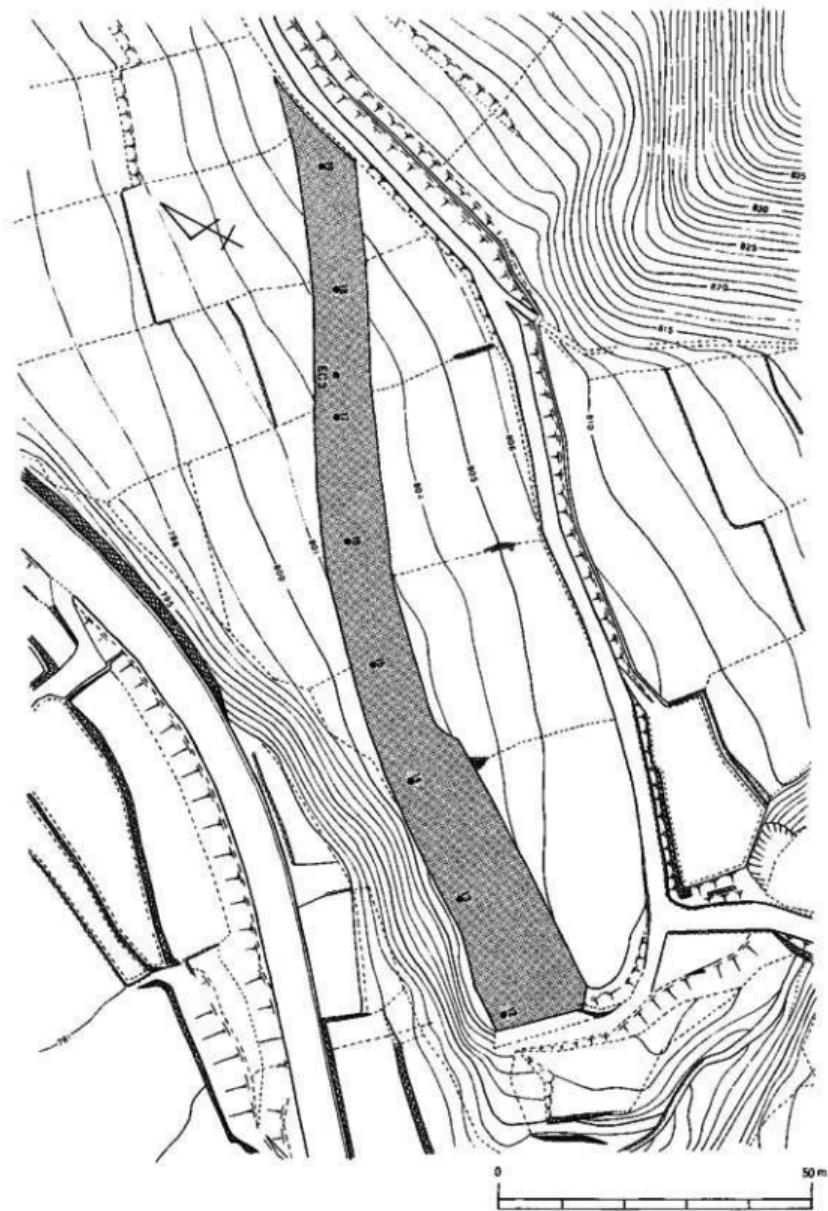
遺跡のある台地は、およそ南北方向に帯状に横たわり、その両端は小さい沢によって分断された形となる。北西斜面を形成している台地上は桑畑が主体となった土地利用となっている。この台地の中央を付替えられた県道が通るが、標高で約800mの位置である。県道との比高は12mとなる。

台地を走る旧道の南東側は山裾がせまり1段高くなった地形であるが、地表には小礫が多くみられる。その一部が旧道を越えて北西側へ押し出してきており、表土層の上部は小礫が混じっている。

発掘調査地区での標準層序は、4層に分けられる。I層は黒色土で小礫が混入した砂質土であり、20cm~25cmの堆積である。II層は黒褐色土で、やや赤色をおびる。25cmほどの堆積である。III層は黒褐色土で礫を含む。20cmの堆積であり、遺物包含層となる。IV層は黄褐色土で地山である。



第1図 郡藏地遺跡位置図



第2図 郷蔵地遺跡地形図

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 住居址と遺物

#### 1. 1号住居址（第3図）

1号住居址は、杭No.EC3の位置において確認された。住居址は、平面が方形で張出部をもつ柄鏡形敷石住居の形態である。東辺3.0m、西辺2.7m、南辺3.0m、北辺3.0mほどであり、各辺ともやや膨みをもっている。

敷居住居址は、ゆるやかな斜面を掘り込んでおり、主体部の方形が検出された段階では南壁側が高く、北壁側が低くなっている。壁高は南壁で36cmほどであり、北壁はほとんど高さが認められなかった。

敷石は厚さが3.0cm前後の平板状の石を壁際に一列にめぐらしている。奥壁にあたる東壁側に分けてやや大きめの平石が敷かれている。なお、敷石の上面は平坦面を整えていることが知られる。また敷石の間には、7cm前後の楕円形で偏平な自然石や、敷石に用いられた平板状の石の小片などが埋め込まれている。とくに敷石と壁際の立ち上がり部分には多くみられる。敷石のない床面部分は、砂質土がややしまった状態であったが、固く踏みしまった部分は認められなかつた。

張出部は西壁中央にあり、西に向かってやや幅を広げて設けられている。方形の主体部と張出部の接する位置に、1枚の敷石が置かれている。さらに2枚の敷石が西側に並ぶが、張出部の状態が不明確となる。

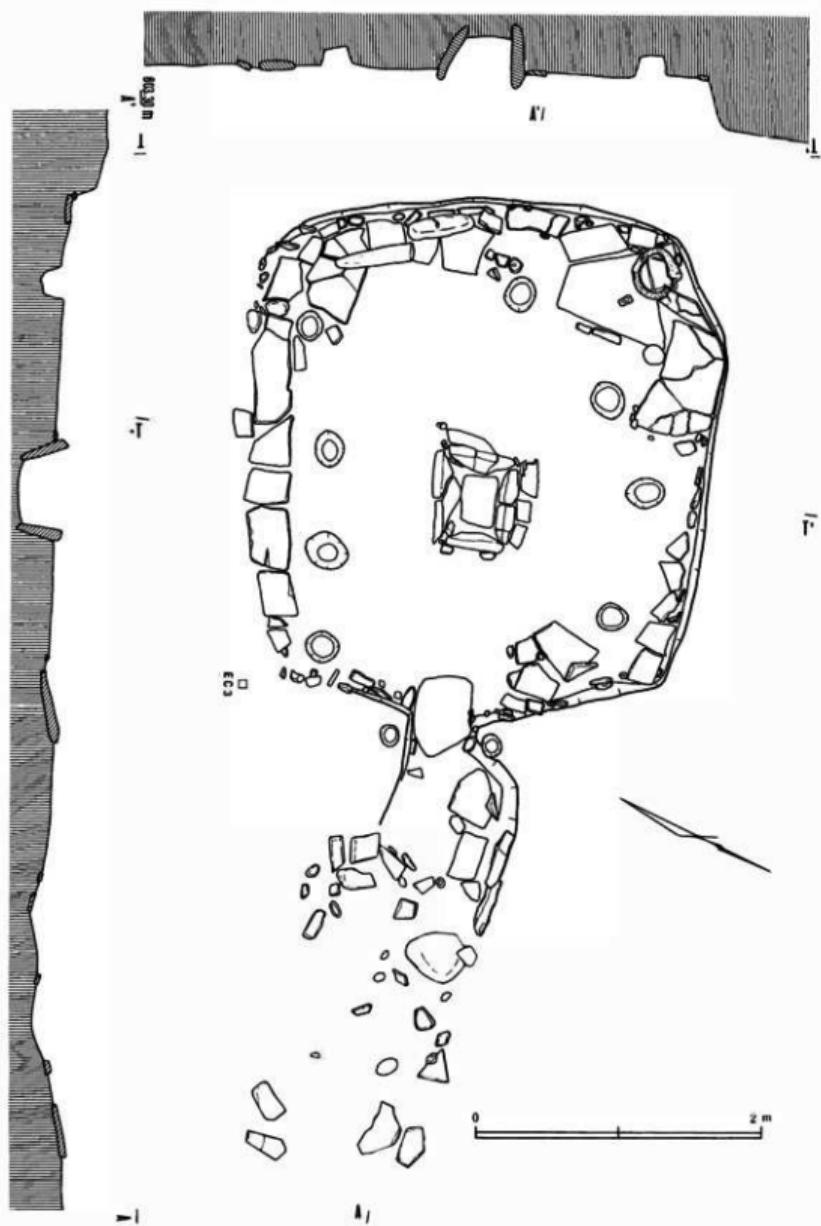
炉は石囲炉であり、主体部の中央付近に設けられているが、わずかに西壁寄りである。床面を掘り込んで、三角形状の平石で囲った炉の規模は、長径60cm、短径40cm、深さ35cmほどである。なお、炉の東から南にかけて長方形の敷石がみられる。炉石の多くはもろくなつておらず、大きな割れ目が認められる。炉の内部からは焼土や炭火物が検出されている。

柱穴は住居址内より8カ所、張出部で2カ所を確認している。住居址の柱穴は、およそ北壁と南壁ぞいの相対する位置で、しかも敷石の内側に4カ所ずつ認められる。柱穴の径は20cm～25cmほどであり、張出部の2カ所は径15cmほどでやや小さくなっている。

なお、住居址内の敷石を撤去した際、東壁や北壁寄りの敷石下部からピットが検出されているが、その性格は不明である。さらに埋甕などについても検出につとめたが確認することはできなかつた。

住居址内の遺物は、覆土中および床面直上から土器・石器類が検出されている。とりわけ奥壁側に石棒と柱状の石、伏せられた深鉢形土器、三角墳形土製品、丸石などが敷石直上において検出されている。

また、張出部付近からの出土遺物は少なく、土器片が少量出土している。



第3図 1号住居址平面図

## 2. 1号住居址の出土遺物（第4、5、6、7図）

### 土器

住居址の覆土中から土器片が多数出土しているが、ほとんどが小破片で復元できるものはない状況であった。（第6、7図）

床面直上で検出された第5図1、2の土器が最も良好なものである。1は深鉢形土器で胴部下半が欠損している。口縁部は微隆帯を巡らして無文帯を構成し、口唇部は4単位の小突起を施している。器面は縄文を地文とし、微隆帯で逆U字状の無文の区画を4単位施している。焼成は良く、色調は黒褐色である。器面に炭化状の付着物もみられる。

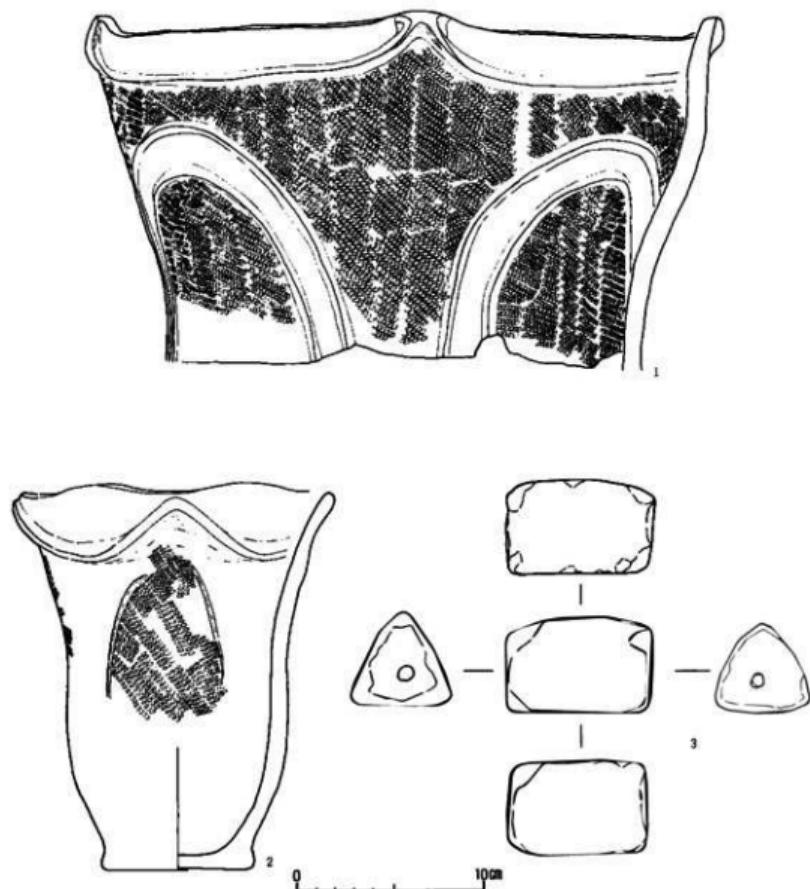
2も深鉢形土器である。口縁部に隆帯を波状に巡らしている。隆帯の下部は沈線による放物線状の区画を施し、その内側を縄文で埋めている。



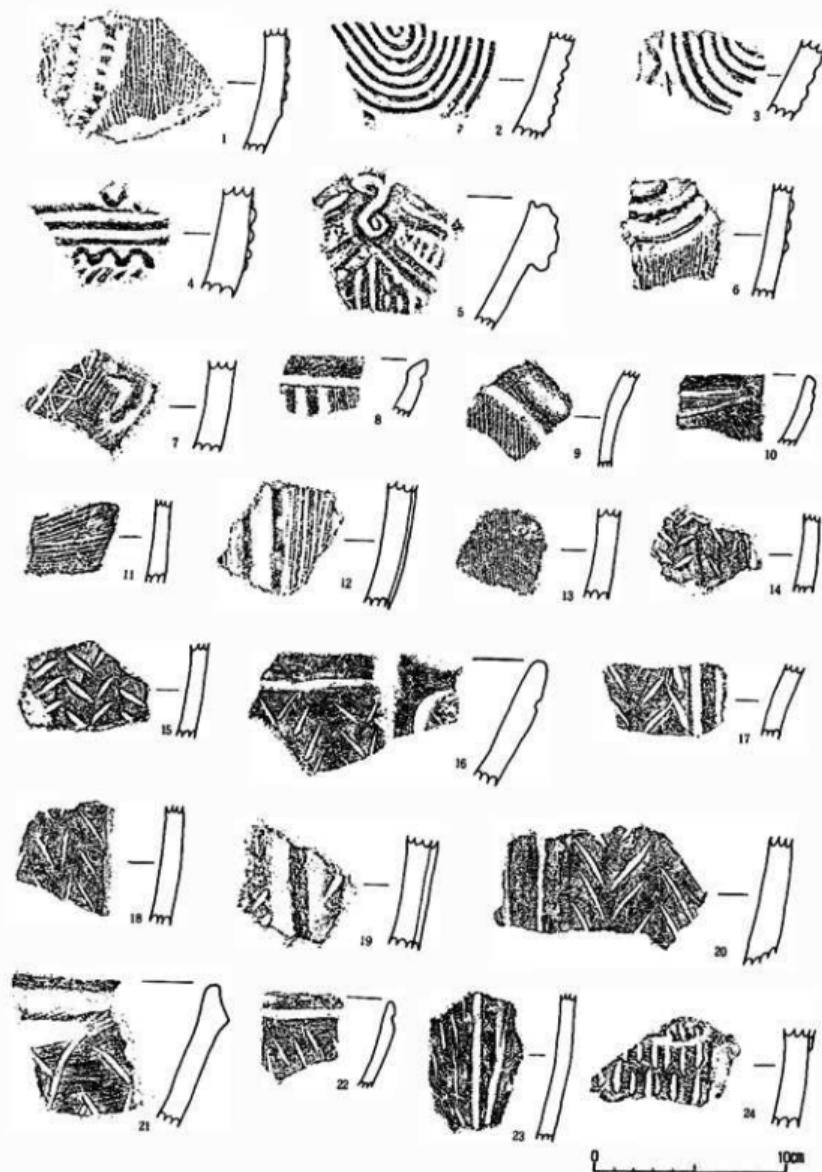
第4図 1号住居址遺物出土状況

第6図は深鉢形土器であろう。1～7は隆線文を用いている。1はU字状の隆帯に刻み目がみられる。2、3は重弧文、4は斜行文、5は波状口縁であり、口縁部にそって隆線による区画を施している。器面は縦方向に沈線文で埋めている。6は隆線による渦巻文で、地文に条線を施す。7は地文に繩文を施す。隆線文と鋸歯状の沈線文がみられる。8、9、11～13は条線を主体としたものである。9は胴部に渦巻文を施す。10は斜行する条線である。11は横位の条線である。

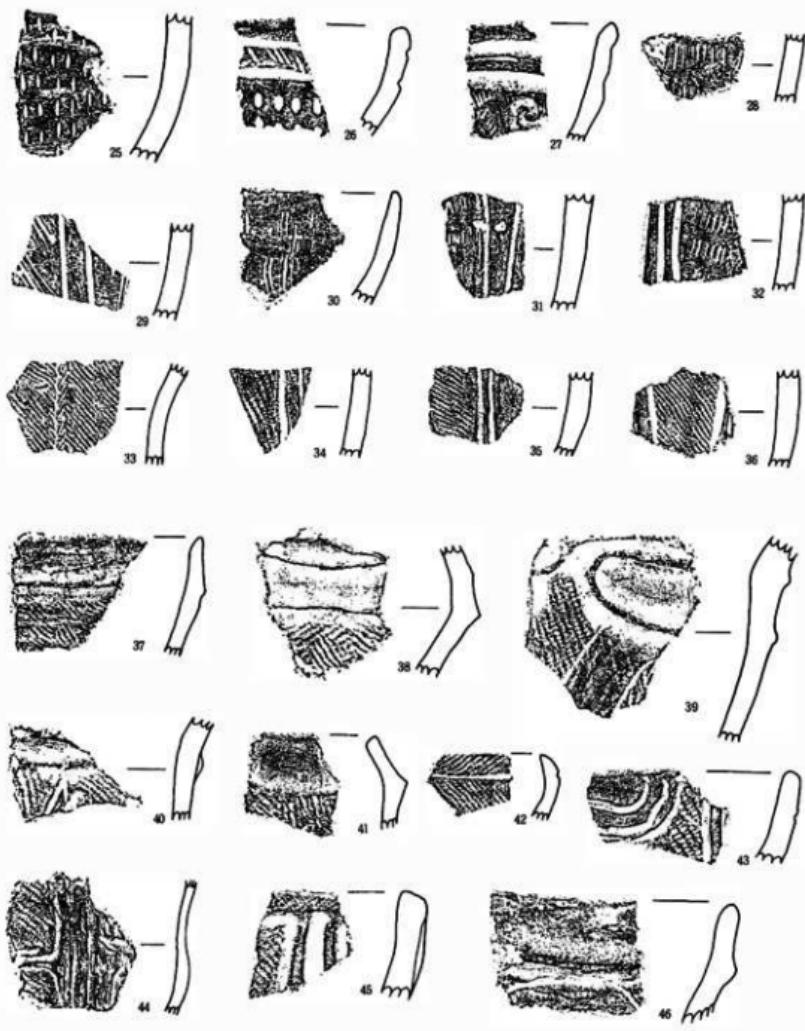
14～21は綾杉状沈線文（連続ハの字文）である。胴部は沈線や隆線による区画が多用される。



第5図 1号住居址出土土器実測図



第6図 1号住居址出土土器拓影(1)



第7図 1号住居址出土土器拓影(2)

16、17、20は沈線の区画である。19は隆線の区画であるが、隆線の両側を指頭による幅広の沈線が施される。21は口縁部に隆線を巡らし、隆線上に縄文が施されたものである。22は沈線が斜行し、23、24は沈線が縦方向に施される。

第7図25は沈線が規則性をもって施されている。26は口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その間に縄文を施し、また胴部には列点文が施される。27～32は櫛歯状沈線文が主体である。27は指頭などによる幅広の沈線を横位に施し、さらに渦巻状の沈線もみられる。29、31、32は2本の縦方向の沈線による区画を行い、その間を櫛歯状沈線文によって埋めている。

33～36は縄文を地文とするものであり、縦方向に2本の沈線による区画が用いられる。37～46も縄文を地文とするが、隆線や沈線による区画が施される。37は口縁がやや屈曲し、口縁部は無文帯となる。38は口縁部に近く、2段の屈曲がみられる。39は隆線による橢円区画が施され、その中や2本の沈線の間は無文となる。40は横の隆線によって区画される。41は口縁が屈曲し無文となるものである。42は口縁部にも縄文を施している。43は口縁部に3本の沈線による弧状文が巡らされ、その間を縦方向に沈線をもって区画している。44は胴部に沈線による方形の区画を施したものである。45は隆帶に縄文を施している。46は口縁部は無文であり、胴部に逆U字状の沈線を施し、その中に縄文を施したものである。

#### 土 製 品

第5図は三角墳形土製品である。長さ7.8cm、高さ5.0cmであり、側面形は正三角形で、正面形は長方形である。正面形の長軸方向に径0.7～0.8cmの孔が穿たれている。なお孔の位置は側面形の中心より、わずかに外れている。

文様は正面、側面の5面にわたってみられず、全くの無文である。胎土、焼成、色調などに特別なものはなく、一般的な土器と同様である。

#### 石 器

第8図1は石棒である。形態としては無頭であり、長さ57.3cm、最大径は12.6cmである。先端に向かって細くなっていくが、先端近くでは7.0cmほどになり、最大径の半分ほどになる。石材は安山岩で、全体は良く研磨して成形されている。

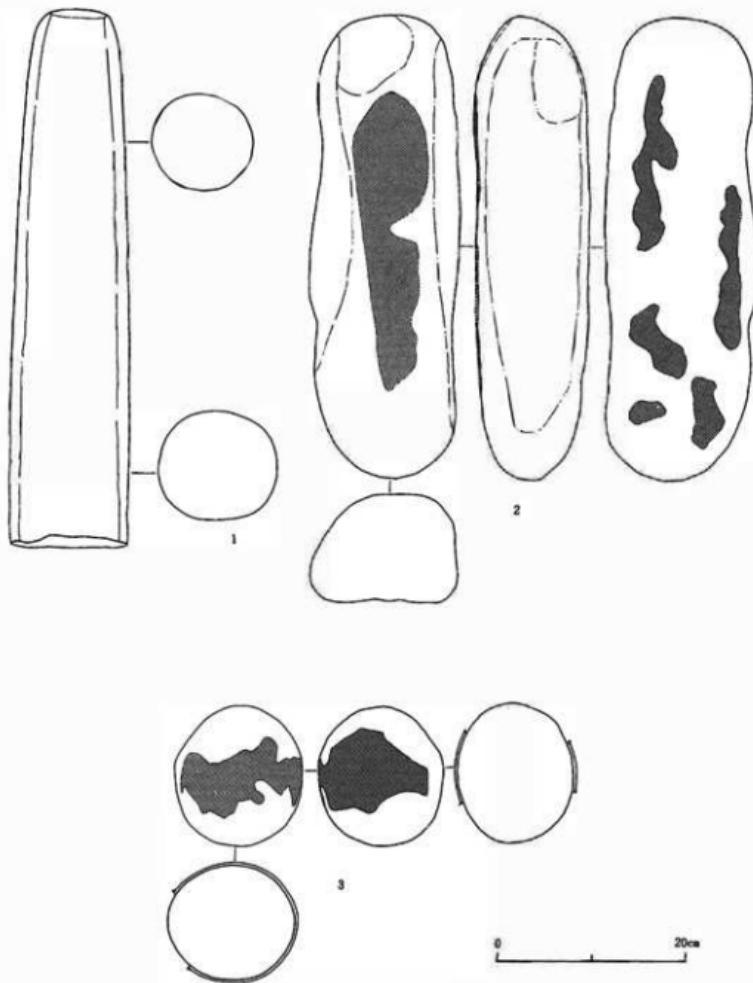
2は長さ49.2cm、幅16.2cm、厚さ12.4cmの柱状の石である。石材は安山岩であり、表面に凹凸がわずかにみられるが、一部に磨耗した痕跡もみられる。

3は丸石である。径12.5cm～14.9cmであり、一部が磨かれている。石材は花崗岩である。

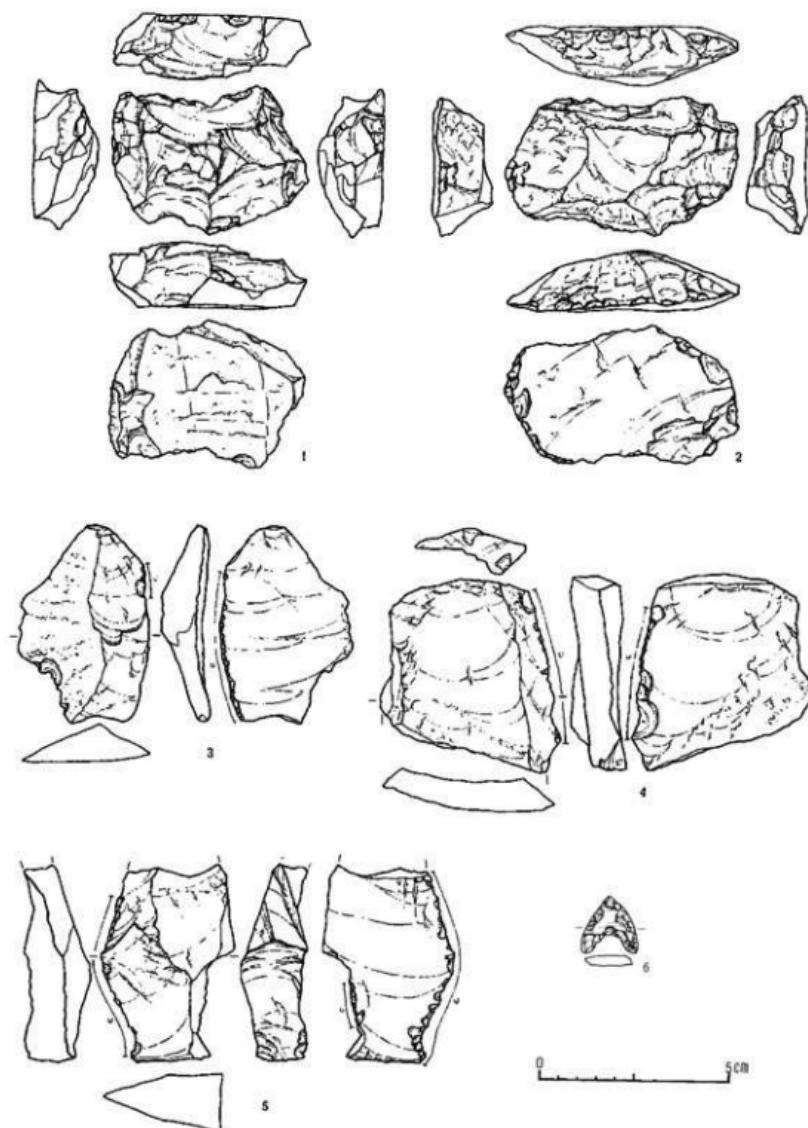
第9図1、2は、使用痕のある石核状の石器である。側面形は舟底形を呈するが、全体として亀の甲形ともいえるものである。母岩を打ちかいて大きな剝片をとり、それを上下から打ちかき小剝片を取ったことが知られる。小剝片を加工して石鏃など製作したことが推測されるが、石核状に残されたものに連続する。小剝離がみられることから、鋸歯縁石器的要素をもつものといえよう。石材はチャートである。

3～5も使用痕としての連続小剝離がみられる剝片状の石器である。石材はチャートである。

6は黒曜石の石鏃である。

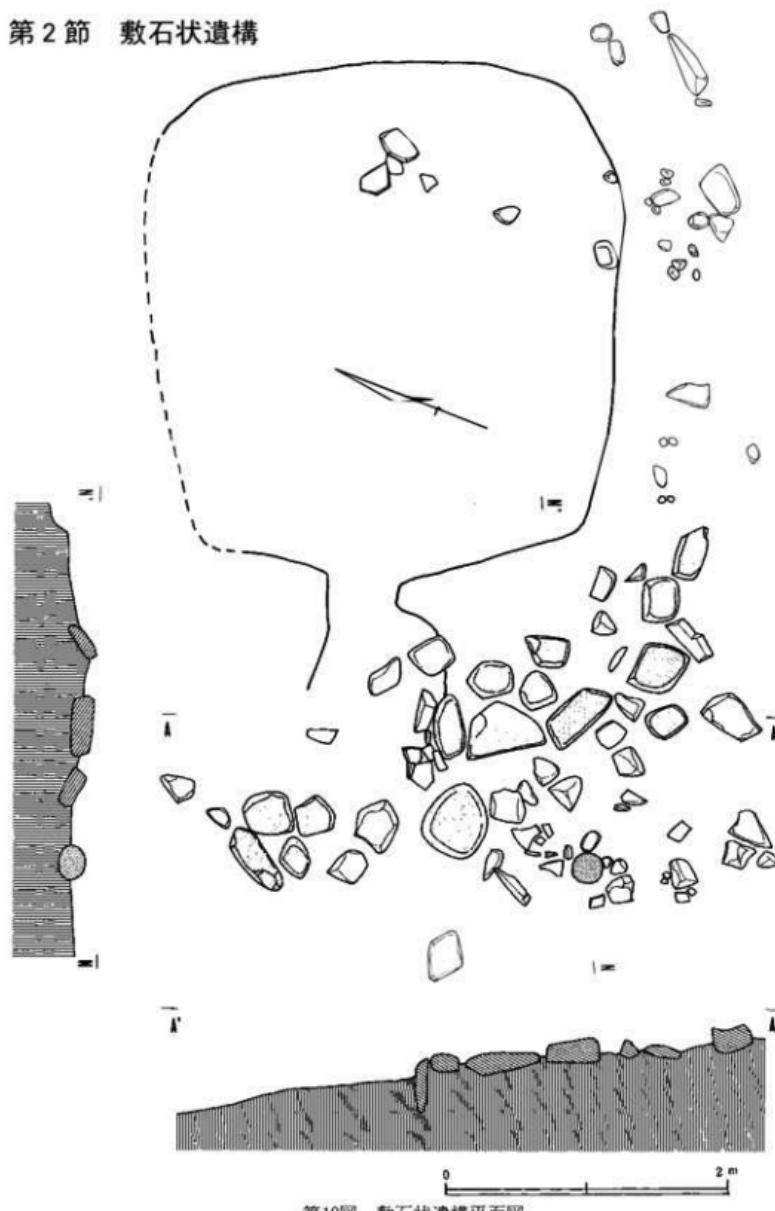


第8図 1号住居址出土石器実測図(1)



第9図 1号住居址出土石器実測図(2)

## 第2節 敷石状遺構



第10図 敷石状遺構平面図

杭No.17において確認されたものである。地表面より60cmの深さで、やや弧状を呈する敷石状の石組である。石は表面が平で方形ないし円形に近いものと、不整形な自然石が混った状態である。なお平な石は厚さも20cm～25cmほどあり、縁などは河原石のように磨耗している。

平な石の上面のレベルは、東側の高い場所と西側の低い場所では約10cmの違いである。さらに敷石状の石組がよく残っている部分の南側をわずかに掘り下げた段階で、不整形な石に混じって直径23cmの丸石が検出された。遺構の性格が明らかでない状況から、丸石がそれに関連するのか、単独と考えるのか不明である。

丸石は1号住居址内出土のものと石材は全く同じ花崗岩であることなどから、類似する性格のものと考えておきたい。また敷石状遺構内からは、縄文中期の土器片がわずかに出土しているが、同じく遺構との関連は不明である。

なお敷石状遺構の下部に1号住居址が検出されたが、その住居址の西から南を囲むような様相もうかがわれるが、層位的な両者の関係が明らかにならなかったので、別の遺構としてあつかった。

### 第3節 遺構外出土の遺物

調査地区は、杭No.17付近を除いて、他の地区からは遺構を確認することはできなかった。ただし遺物としては、土器を主体に2,000点近いものが出土している。なお遺物の集中する地区は杭No.15～No.17の間であり、微地形的には、南東側から北西へ扇状地帯にのびた地形の先端にあたるところである。かつての畠地の区画造成のおりに埋め込まれたと考えられる状況がうかがえた。

#### 土 器

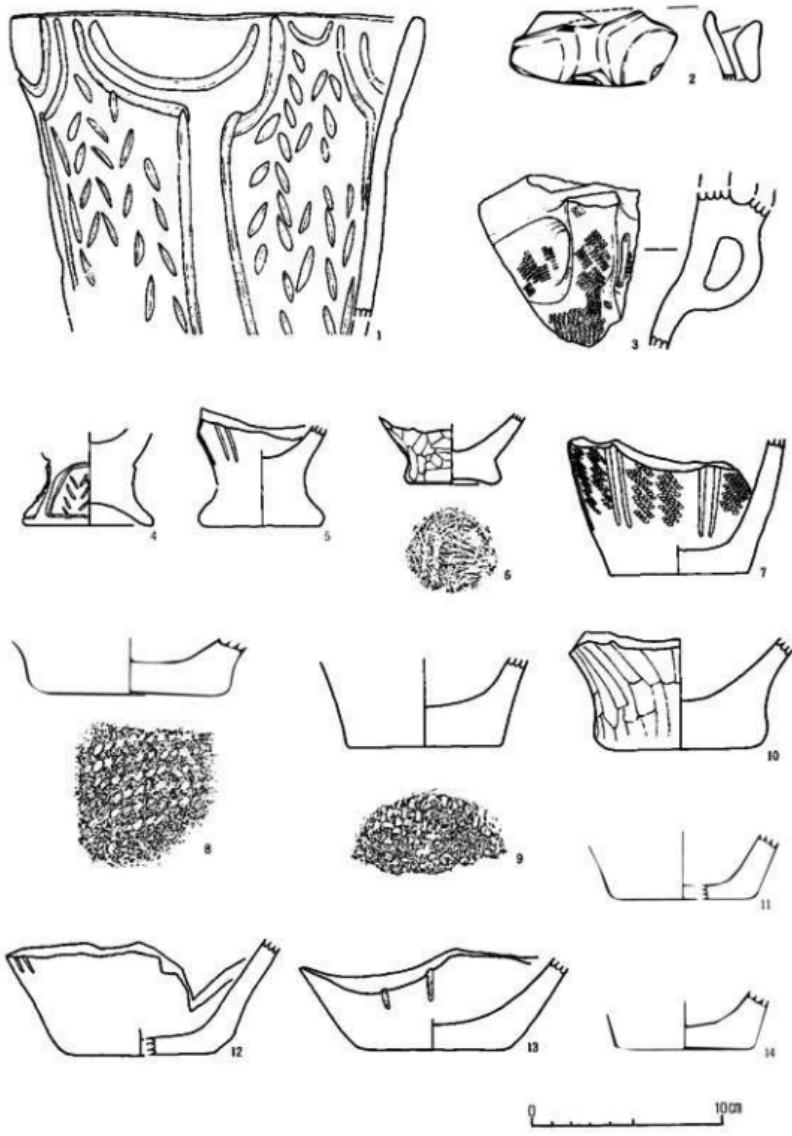
第11図1は深鉢形土器である。口縁部に弧状の沈線文が施され、さらに胴部にかけて2本の沈線を垂下し、その間に連続ハの字文によって施文されている。2は口縁部で赤色塗彩がみられる。3は波状の口縁部で、2連の環状把手が付く。縄文を地文として施している。

4は脚付土器である。4単位の沈線による半円形の区画内に連続ハの字文を施している。5は台付状土器である。6はヘラ削り状の調整痕が明瞭である。底部はやや台付状を呈する。7～14は底部である。8、9は網代痕がある。10はヘラ状工具による調整痕がみられる。

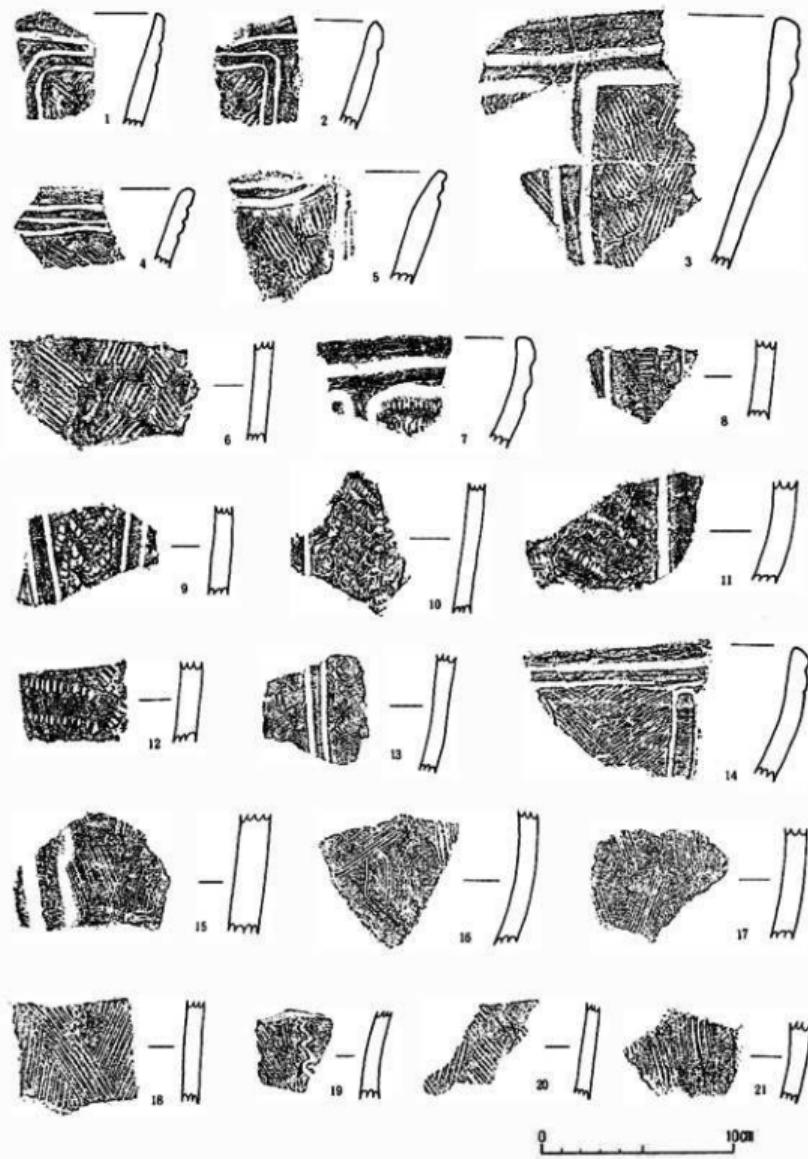
第12図1～5、7、14は口縁部であり、ゆるやかに外反する。1、2は口縁部に沈線をめぐらし、胴部に2本の沈線に用いて縦長の区画を施し、その中を櫛歯状工具によって左右の方向から斜行沈線で埋めている。

胴部に施文される櫛歯状工具による沈線は、左右からの斜行沈線の連続が多いが、7や8のように縦と横方向のみの沈線もある。また沈線にも粗密がみられ12、13は沈線は少くない。3、5、7、11、17は、区画に用いられる沈線は太くて浅いものとなっている。19は蛇行沈線がみられるものである。

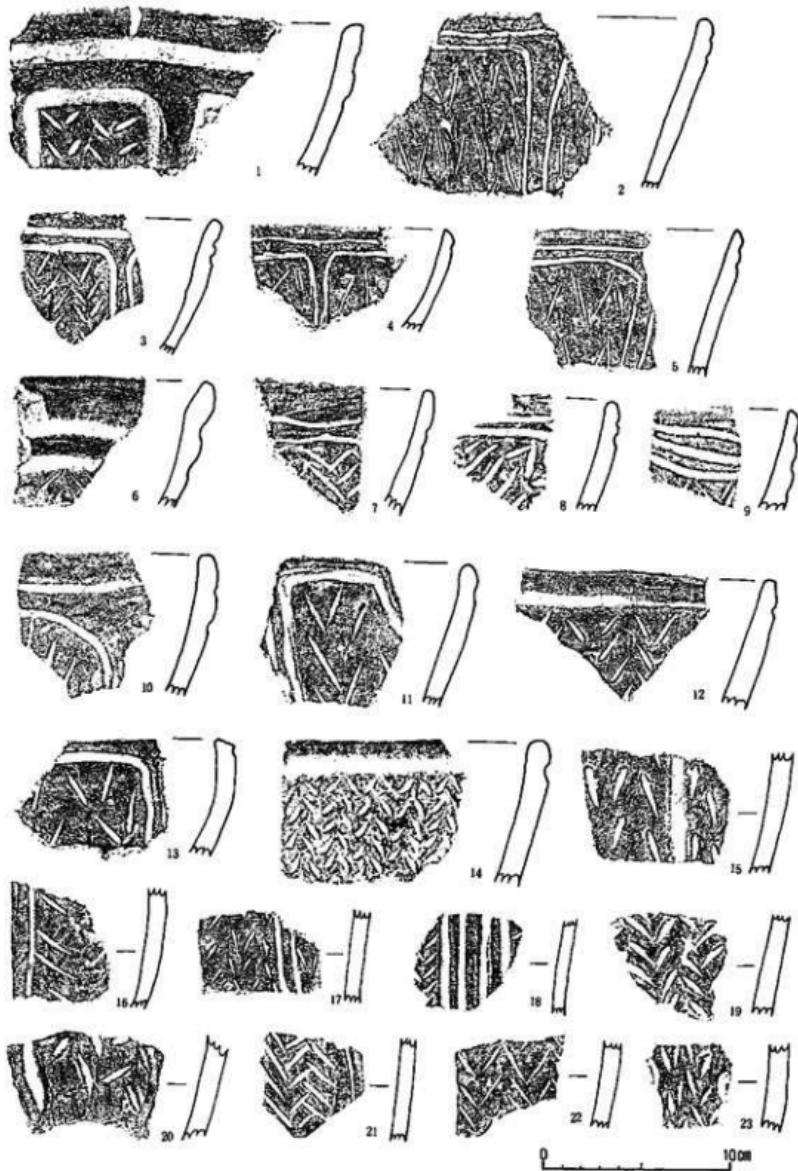
第13図1～23、第14図1～16、第15図1～3、7～12は連続ハの字文を施したものである。



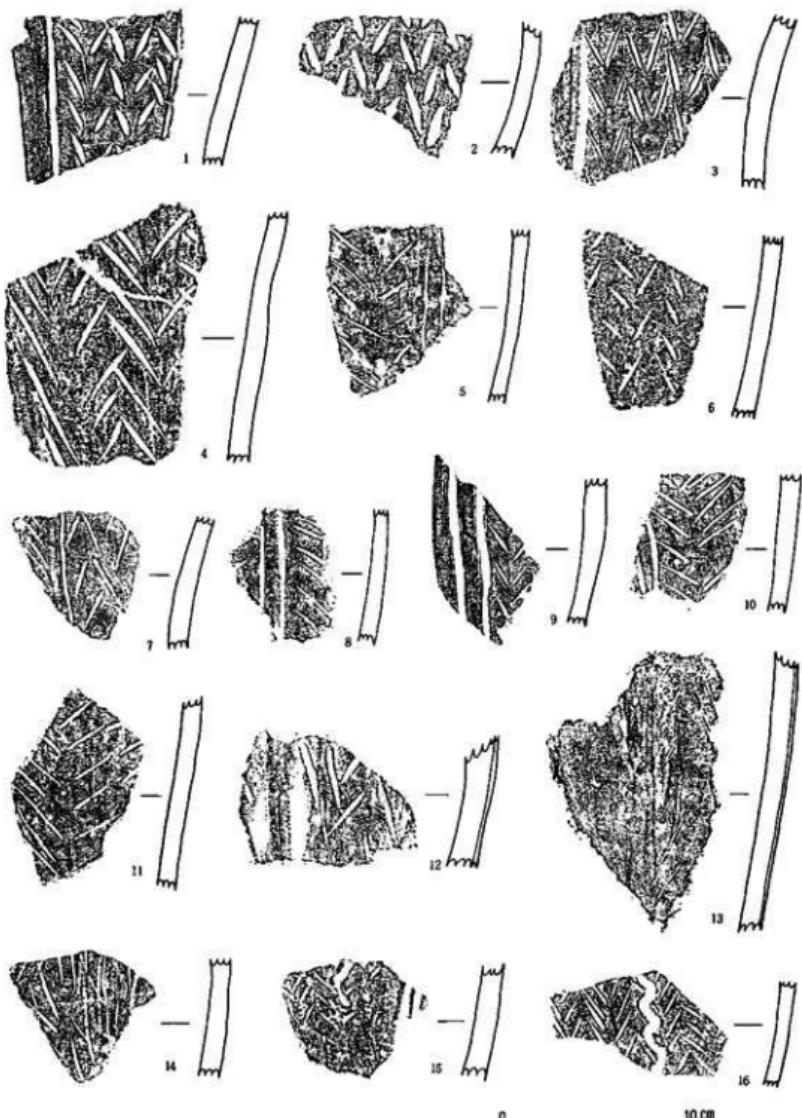
第11図 遺構外出土の土器実測図



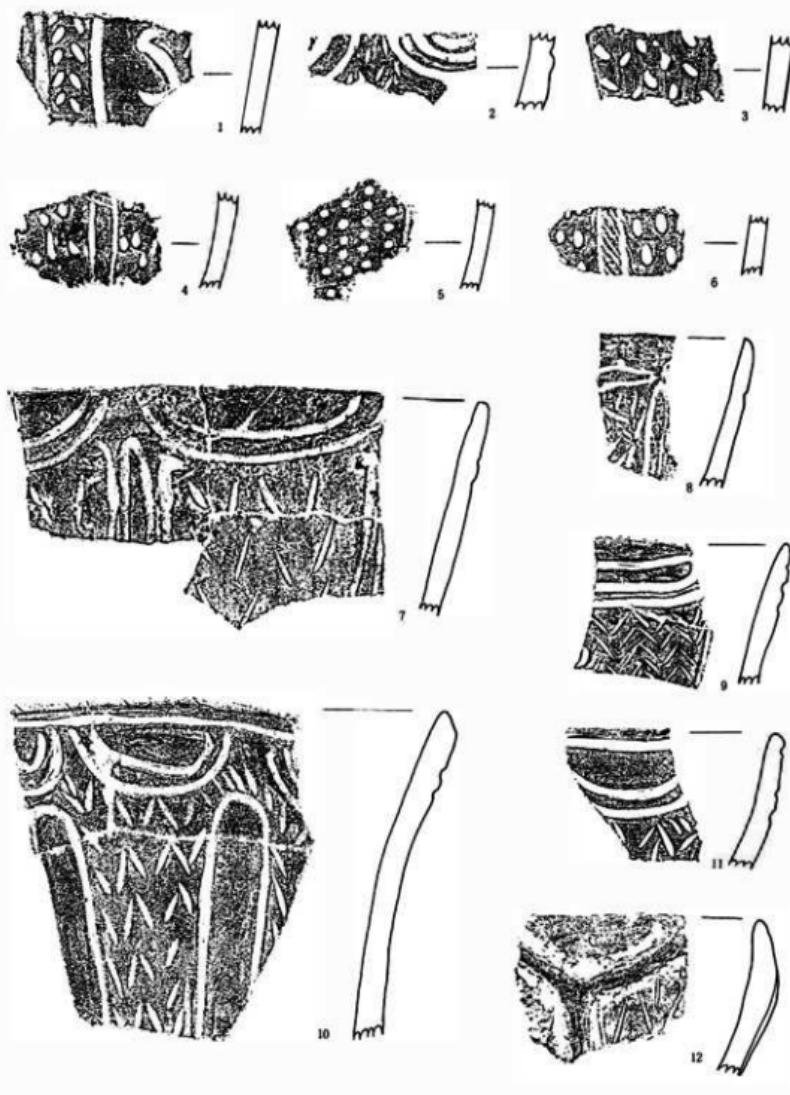
第12図 遺構外出土の土器拓影(1)



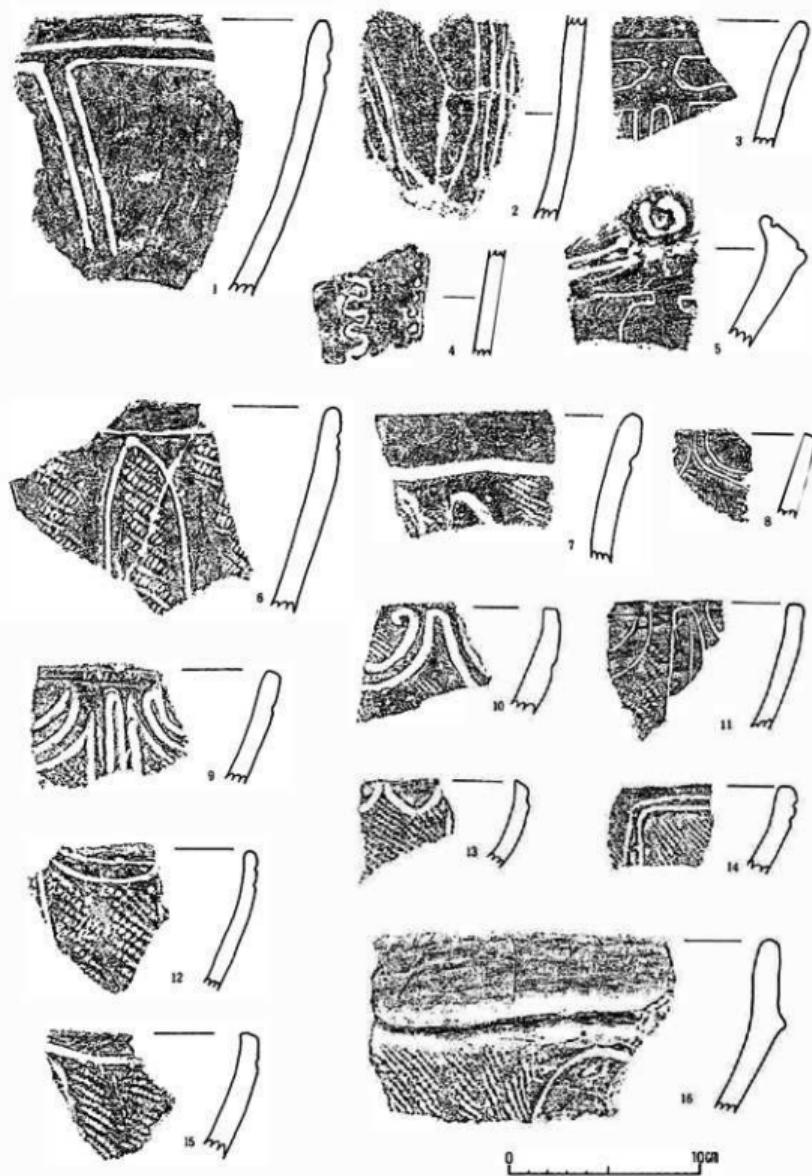
第13図 造構外出土の土器拓影(2)



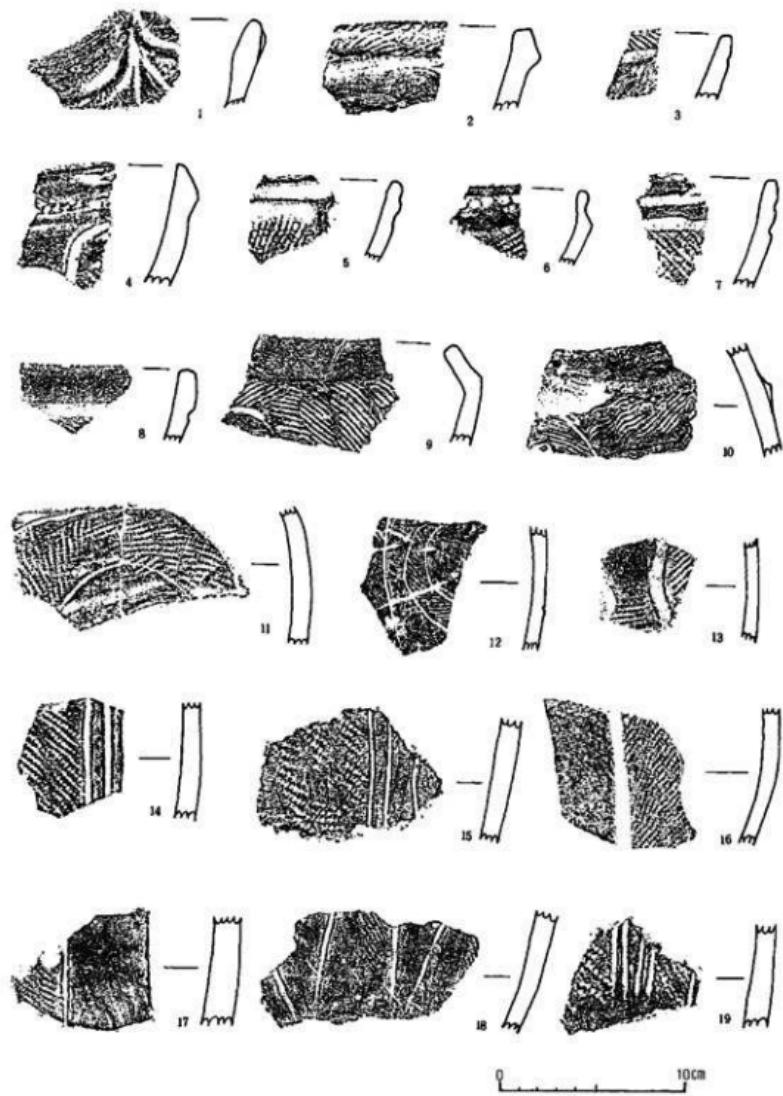
第14図 遺構外出土の土器拓影(3)



第15図 遺構外出土の土器拓影(4)



第16図 遺構外出土の土器拓影(5)



第17図 遺構外出土の土器拓影(6)

第13図1、6は、口縁部に太い沈線をめぐらし、胴部に綫長の区画を施し、その中を連続ハの字文で埋めている。連続ハの字文はヘラ状工具の違いによって細いものと太いもの、さらに短めのもの、長めのものなど変化に富んでいる。14のように連続ハの字文がきわめて密度が濃く施されているものもみられる。

第14図の12、13は胴部に微隆帯を縦方向に施し、区画した中を連続ハの字文で埋めている。16は胴部に蛇行沈線文を垂下したものである。

第15図1は、胴部に蛇行沈線と縦方向に2本の沈線を垂下している。2本の沈線の中をハの字文で埋めている。3は連続ハの字文がやや列点状に近いものとなっている。

4～6は列点文である。6は垂下された2本の沈線内を縦文で埋めているものである。

2、7～12は、口縁部に弧状の沈線文をめぐらしたものである。7のように口縁部に沈線をめぐらさないものと、10のようにめぐらしてから弧状の沈線文を施すものがある。12は隆線を用いているものである。

第16図1～5は沈線のみのものである。1は沈線による区画文のみで、区画内は全くの無文である。3は口縁部に沈線をめぐらし、その下部に長円形ないし弧状の沈線を施し、さらに胴部にかけて縦方向の区画文が施される。

第16図6～16、第17図1～19は、縦文を地文とするものである。第16図6、7は、口縁部に沈線をめぐらし無文帯をつくり、胴部に沈線によって縦方向に長円形の区画文を施す。縦文は磨消し状である。16は口縁部に隆線を用いて無文帯をつくっているものである。

8～13、15は、口縁部に弧状の沈線文を施したものである。14は沈線で長方形の区画文を施している。

第17図1は、波状口縁であり、隆線による口縁部の区画を行っている。2、3は口縁部先端にも縦文を施したものである。4は口縁部の隆線にも縦文が施されている。9は口縁部が内側に屈曲する器形である。11～13は胴部に円形状の沈線文を用いているものである。

#### 石 器

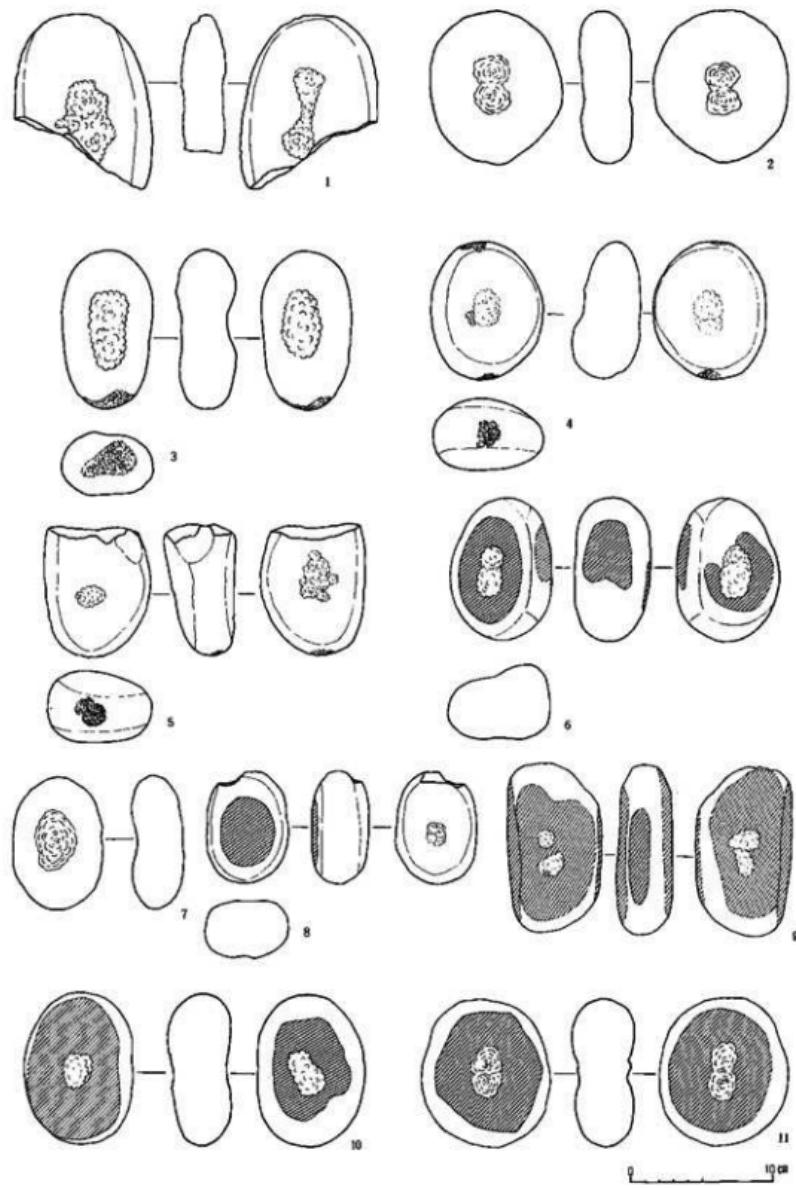
第18図1～11は、凹石である。形態は横円形および不整円形で偏平なものが多い。凹の部分は両面の中央付近にあり、1カ所と2カ所のものがある。また3、4、5は、長軸方向の先端部に打痕がみられる。さらに6、8～11は、石の表面が研磨された状態となっている。

石材は安山岩が多く、6、8、9が花崗岩である。

第19図1、2は、磨石である。石材は1が花崗岩であり、2が安山岩である。3は打製石斧であり、4は磨製石斧である。

5～7は石棒である。5は杭No16～No17の中間で、畠の石積際から出土したものであるが、遺構に伴う出土状況ではなかった。安山岩製の有頭石棒である。良好な成形であり、その断面は円形を呈している。

6は表面に凹部分が多くみられるもので、石材は安山岩である。7はディサイトである。



第18図 遺構外出土の石器実測図(1)



第19図 遺構外出土の石器実測図(2)

## 第4節 遺跡出土の石について

調査地区から出土した石器類、および敷石住居に用いられた石材について、その鑑定を山梨文化財研究所に委託し、それらの結果の報告を河西学氏より受けた。以下、報告をもとに若干の課題を述べておきたい。

第1表 郷藏地遺跡の岩石名

試料番号	岩 石 名
G-1	斜方輝石・オージャイト-安山岩
G-2	角閃石・斜方輝石・オージャイト-安山岩
G-3	黒雲母-花崗岩ポーフィリー
G-4	中粒石質砂岩
G-5	珪質頁岩 ("チャート")
G-6	珪質頁岩 ("チャート")
G-7	黒雲母-花崗岩
G-8	カンラン岩・角閃石含有、斜方輝石・オージャイト-安山岩
G-9	中粒石質砂岩
G-10	中粒石質砂岩
G-11	白雲母-花崗岩
G-12	黒雲母-花崗岩
G-13	角閃石含有、斜方輝石・オージャイト-安山岩

G-1、G-2の石は、敷石の間に埋め込まれた板状の石の小破片である。G-3、G-7は、住居址内出土の丸石と同じ石材と考えられる調査区内の小石である。またG-11、G-12は遺跡の下を流れる塩川の転石である。

G-4、G-9、G-10は、敷石に用いられた板状の石である。G-5、G-6は、住居址内出土の剝片状の石器と同じ石材で、調査区から出土している。

G-8は、磨石や凹石に用いた石材である。G-13は、調査区内の一画に露頭する巨石の一部である。

石棒、磨石、凹石などの石器類には安山岩を多用していることが知られたが、安山岩は地域的に入手しやすい石材と思われる。また丸石についても塩川上流域の金峰山周辺に堆積する花崗岩であり、塩川の転石を利用したこととも考えられよう。

住居の敷石に用いられた中粒石質砂岩や剝片状の石器の珪質頁岩など、その堆積地域については明かではない。郷藏地遺跡の各種の石材から、その生活領域を考えてみると今後の地質学的な成果の蓄積に期待することはきわめて大きいといえよう。

## 第IV章 まとめ

### 第1節 敷石住居について

郷蔵地遺跡の1号住居址は、柄鏡形敷石住居である。出土遺物の検討から、縄文時代中期後半であり、特に最終末にあたる時期のものといえる。

1号住居址の主体部が方形であること、山梨における中期の敷石住居址例の中では特徴的である。この敷石住居の変遷から1号住居址の検討を行ってみたい。

一般に敷石住居は縄文時代中期後半の時期に初源をもち、後期後半に削減するとされている。この敷石住居について、4期に分けて変遷過程をとらえる考え方がある。<sup>(1)</sup>

第I期初源期－中期後半－

第II期成立期－中期末・後期初頭期－

第III期発展期－後期前半－

第IV期終末期－後期後半－

1号住居址の場合、住居址内の土器から中期後半としたところであり、第II期に相当することになる。山梨の敷石住居については、15遺跡16基が報告されているが<sup>(2)</sup>、第II期としてとらえられるものは6基であり、4割ほどである。なお、その分布は出土例に限界はあるものの、県東部に集中している傾向がみられる。今回の1号住居址は、近年の発掘事例からも数少ない県北部における例である。

敷石の施されたかたによって地域差が認められることが関東地方の例によって指摘されている。全面的・部分的な敷石であるのかによって地域差が認められるかは、山梨の敷石住居については今後の課題である。

第II期の敷石住居の特徴は、柱穴が主柱穴配置から、壁周縁に柱穴がめぐるものへと変化し、炉は奥壁寄りから、出入口（張出部）寄りに設けられる傾向があるとされる。1号住居址については、柱穴配置は壁周縁とはいはず、主柱穴配置の様相を残しているが、炉はわずかに出入口寄りになっている傾向がうかがえる。

また、主体部は円形・椭円形に加えて、隅丸方形ないし方形のものが登場してくるのが第III期発展期とされるが、1号住居址は方形の主体部をもつものである。さらに、張出部の形状変化と埋甕については張出部の先端部や主体部との接続部に大半が設置されるのが第II期であったが、1号住居址では張出部での不明確さはあるものの埋甕を検出することはできなかった。

以上のように、郷蔵地遺跡の1号住居址は敷石住居として中期後半に位置づけられることが、4期の変遷過程の検討からも知られるのである。ただし、第II期と第III期の様相がやや混在しているところがあり、その過渡的段階を示すものが1号住居址としてとらえておきたい。

注

1) 山本暉久「敷石住居」『縄文文化の研究』8, 1982

2) 森和敏『古宿道の上遺跡』牧丘町教育委員会1981, 報告書の巻末に森本圭一氏作成の敷石住居址の一覧がある。

(森本圭一 作成)

発見地	時期	現況	記録	報告
小瀬沢町平出	堀の内	破壊	図・写真	未完
長坂町塚川競馬場	堀の内	半壊		なし
中道町右左口城越	曾利 IV	埋め戻す	図・写真	発掘調査報告書 昭44年
三珠町大塚北原	曾利(?)	"	図	史跡・名勝天然記念物調査10回 昭10年
都留市小形山中谷	加曾利B	"	図・写真	発掘調査報告書 昭48年
都留市法能	堀の内、加曾利B	"	写真	日本考古学年報5号 昭27年
都留市尾崎原(2軒)(地小学校)	加曾利B	移転復元	"	富士博物館報告4号 1960年
都留市神門	曾利 III	?	?	人類学先史学講座14 昭15年
秋山村富岡	加曾利B	破壊	図	富士博物館報告4号 1960年
丹波山村高尾	加曾利E(?)	埋め戻す	図	県政60年誌 昭27年
大月市宮谷金山	?	?	写真	先史原史時代調査 昭7年
大月市駒橋大古屋敷	?	?	図	"
牧丘町西保中古宿道上1890(2軒)	曾利V、堀の内	保存(一部)	図・写真	(本報告書)
上野原町大倉367・392	曾利 IV	埋め戻す	図・写真	上野原町埋蔵文化財調査報告書1 昭56年
大泉村金生	晩期	"	"	金生遺跡 昭56年

## 第2節 丸石について

郷戸地遺跡の1号住居址内から検出された丸石は、花崗岩で直径15cmほどの大きさのものである。丸石については、中部山地を中心に分布し、その性格はきわめて祭的なものとされているが、石棒のように意図的に突実されていないのが現状である。

近年、武藤雄六氏等によって丸石が積極的に取りあげられているが<sup>(1)</sup>、山梨県でも八ヶ岳山麓の金生遺跡の大規模な配石遺構から、石棒や丸石が出土して注目されているところである。以後、久保地遺跡(都留市)、釈迦堂遺跡(三口神平地区、勝沼町)、根古屋遺跡<sup>(2)</sup>(白州町)、清水端遺跡<sup>(3)</sup>(明野村)、姥神遺跡・豆生田第3遺跡<sup>(4)</sup>(大泉村)、石堂遺跡<sup>(5)</sup>(高根町)などからの出土が報告されている。

山梨県の分布状況は、北部の八ヶ岳山麓ばかりではなく、中部から東部にかけてもみられるよう広範囲におよんでいる。しかも縄文中期の曾利式土器を伴う住居址内からの出土例が多い。なお、前期については不明であるが、中期に引き続いて後期の住居址内や後期・晩期の配石遺構からの出土例が認められている。

丸石は、丸い自然石をそのまま用いたと思われるものと、打痕がみられ人為的に調整されたといえるものがある。1号住居址出土の丸石は花崗岩であり、塩川水系の上流にある金峰山周辺の花崗岩の可能性がある。いずれにしても、丸石の住居址内における出土位置や伴出する遺物のあり方が、その性格の一端を知ることになるであろう。

1号住居址の丸石は、石棒、三角墳形土製品、さらに倒置された深鉢形土器などと共に出土している。この石棒、三角墳形土製品は祭祀的、呪術的なものとされており、丸石の性格を暗示するものである。なお、類似するものとして白州町の根古屋遺跡の第1号住居址がある。曾式期の住居址から釣手土器、倒置された深鉢形土器、丸石、立石が出土しており、祭祀的性の強い住居としている。

なお郷蔵地遺跡の1号住居址は敷石住居であったが、丸石をはじめとする祭祀的性格の強い物の出土をもって、敷石住居がとりわけ祭祀的性格をもつ住居形態とするかは検討すべきことと思われる。

#### 註

- 1) 中沢厚、武藤雄六、小林公明、島 亨、平出一治「座談会丸石神と考古学」『どるめん』28,1981
- 2) 平野修「根古屋遺跡」白州町教育委員会 1985
- 3) 榎原功一「豆生田第3遺跡」大泉村教育委員会 1986
- 4) 雨宮正樹「石堂遺跡」高根町教育委員会 1986

### 第3節 石棒について

1号住居址の奥壁で、敷石直上から倒れたと思われる状態で出土した石棒は、無頭で長さが3cmである。傍らに柱状の石が横たわっていた。

石棒の出土例は、中期後半期に入ると住居址内の出土例が圧倒的に多いことが知られ、そのかでも奥壁部に出土するものが多いとされている<sup>(1)</sup>。また中期末・後期初頭期では、あい変ず住居址内の出土例が多数であるが、一部に屋外出土例も出現する時期である。とくに柄鏡敷石住居址内に出土する例が多く、石棒と敷石住居の関連が強調されていわれるところである。

1号住居址の石棒は、中期後半期の屋内石棒祭祀が盛んになって、やがて中期末・後期初頭の最盛期になった時期の所産と考えられるものである。郷蔵地遺跡の調査区内からは、3本の石棒が出土しているが、その中の1本は有頭石棒の形状である。さらに調査区に隣接する畑内の一画に、石棒の破損したものが2本据えられていた。これらの石棒の時期は、調査区の構外出土の土器が、曾式期のものが主体を占めていることから、中期後半でも最終末の時と考えておきたい。

この郷蔵地遺跡の集落では、石棒祭祀が一般的に行われていた傾向を示すものと推定しておたい。

中期中葉に中部山地を中心とした地域にみられる石棒は、上石田遺跡<sup>(1)</sup>（甲府市）の例のように炉址からの出土が注意されている。後半期に入ても炉と石棒との関連が深いことが指摘されており、石棒と火との結びつきが注目されている。

炉址および炉付近以外に、住居址の奥壁に置かれた石棒のあり方や屋外祭祀の石棒の性格な、検討すべき課題は多いのである。

## 註

- 1) 山本暉久「石棒」『縄文文化の研究』9, 1983
- 2) 谷口一夫「上石田遺跡」甲府市教育委員会 1973

## 第4節 三角墳形土製品について

1号住居址の奥壁から出土した三角墳形土製品は、側面正角形で無文である。その出土状況は奥壁の東側隅で、大きな敷石上に倒置された深鉢形土器と並んで出土し、さらに敷石の傍らに丸石を伴うというものである。

山梨の三角墳形土製品の類例<sup>(1)</sup>は、本例と上の平遺跡（中道町）、川又南遺跡（須玉町）の3例である。小林氏<sup>(2)</sup>、小島氏<sup>(3)</sup>の集成段階では、山梨の出土例は報告がなされていなかったのであり、山梨は空白地域となっていた。

上の平遺跡のものは、側面二等辺三角形で文様は沈線による区画文と渦巻文を施したものである。遺構出土ではないが周囲の土器などから曾利式期とされている。また川又南遺跡のものは、側面は3辺が反っていて、5面の全てに渦巻文が施されている。同じく遺構に伴うものではないが、後期初頭の土器の散布が顕著であったという。

1号住居址の三角墳形土製品は、無文ではあるが遺構からの出土であり、しかも石棒・丸石などの祭祀的性格の強い遺物と共に伴していることから、資料的に重要であることが指摘できる。時期としては敷石住居や出土土器から中期後半でも最終末と考えられるものである。

山梨の三角墳形土製品は、3例とも一般にいわれるところの盛行期としての中期後半から後期初頭に所属するものといえよう。

1号住居址の壁際からの出土は、富山県北代遺跡や石川県笠舞遺跡でも報告されているところであり、注意すべき出土位置であろう。さらに福島県山王館遺跡からは、土壤内の屈葬遺骸に伴って発掘されたという報告がある。従来からいわれている孔に紐を通して用いたという使用法など、三角墳形土製品をめぐる問題が多い。

分布からみても偏在性をもつ三角墳形土製品は、その全国例としても70数例であり、土偶や石棒などとの比較ではきわめて少ないものである。今後とも類例の増加に伴い、その性格などについて究明されることを期待したい。

## 註

- 1) 山梨の三角墳形土製品の数例は、方形周溝墓群で知られた上の平遺跡のうち、縄文の一括資料の1つとし出土したものである。担当者の小林広和氏より資料提供および教示を得た。さらに川又南遺跡の資料は、山路恭之助氏より提供を受けた。これらの資料については、山梨県埋蔵文化センターの「紀要3」1987に発表予定である。
- 2) 小林康男「三角墳形土製品考」『長野県考古学会誌』37, 1980
- 3) 小島俊彰「三角墳形土製品」『縄文文化の研究』9, 1983

# 図 版



遺跡遠景



遺跡近景

図版 2



調査区



発掘風景



遺跡全景



調査風景

図版 4



敷石状遺構



敷石状遺構と丸石



圖版 6



遺物出土狀態



住居址張出部



住居址全景(1)



住居址全景(2)

図版 6



住居址全景(3)



住居址掘り方

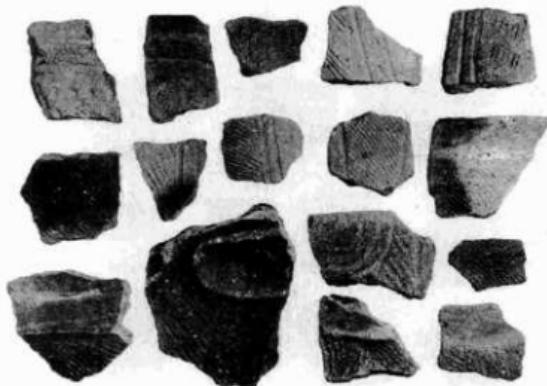


住居址内出土土器(1)



住居址内出土土器(2)

图版10



住居址内  
出土土器(3)



1



2



3



住居址内出土土器(4)

1、2 深鉢形土器

3 三角壇形土製品





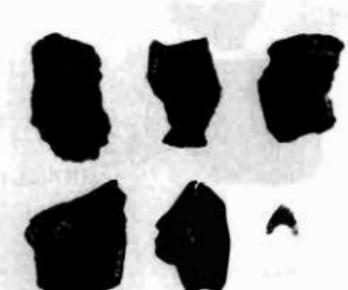
1



2



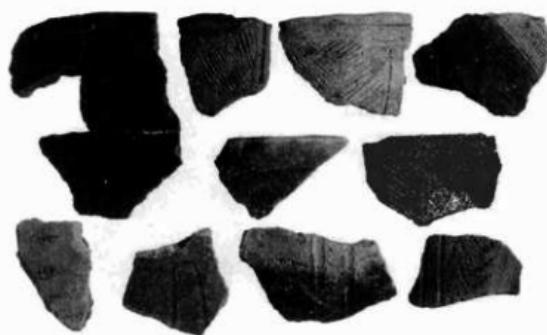
3



住居址内出土石器  
1.石棒 2.丸石  
3.柱状石 4.剥片状石器·石鏃

4

圖版12



遺構外出土土器(1)



遺構外出土土器(2)

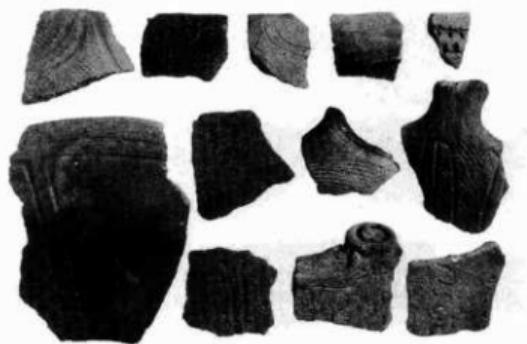


遺構外出土土器(3)

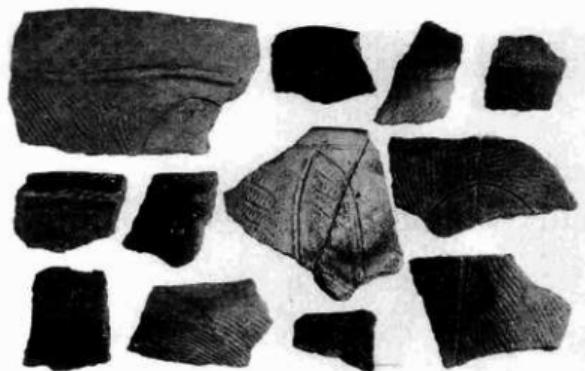


遺構外出土土器(4)

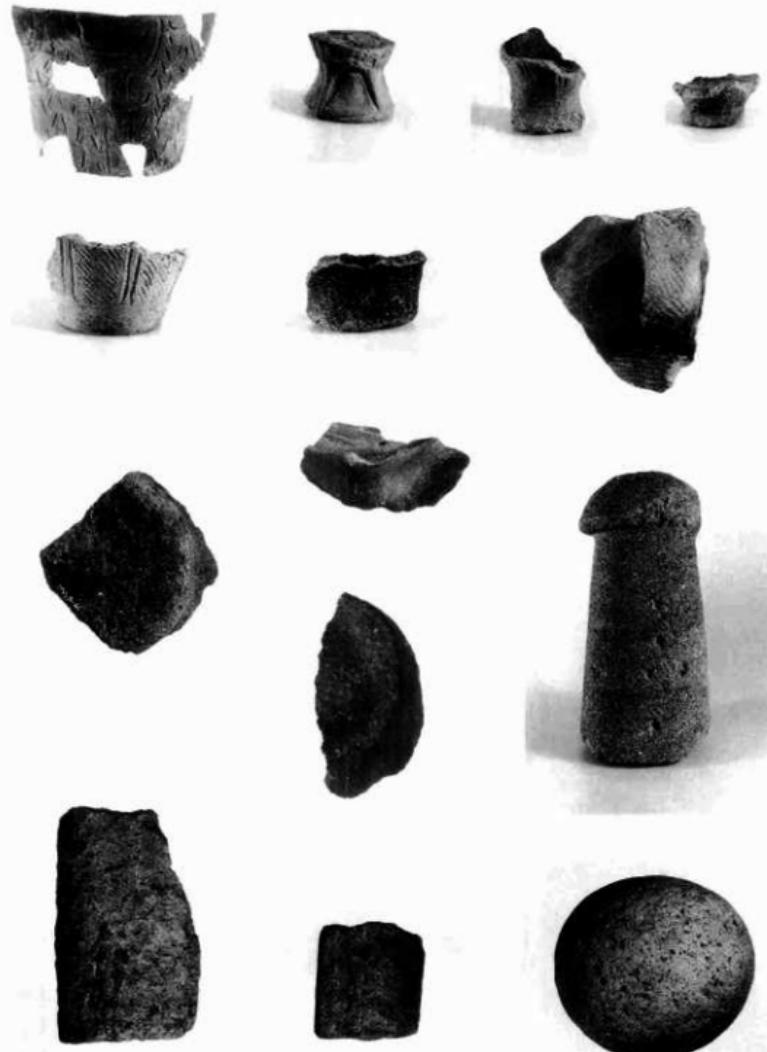
圖版14



遺構外出土土器(5)



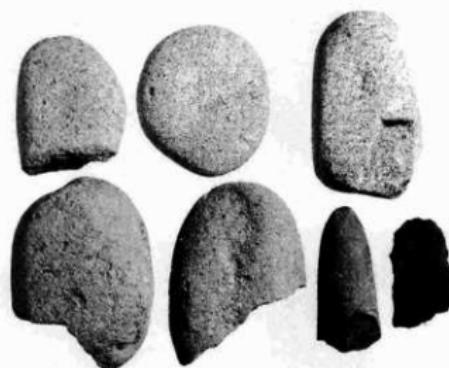
遺構外出土土器(6)



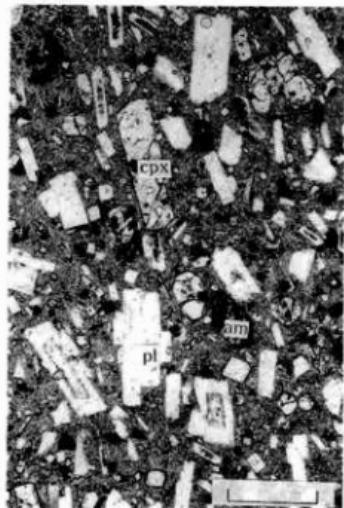
遺構外出土土器と石器



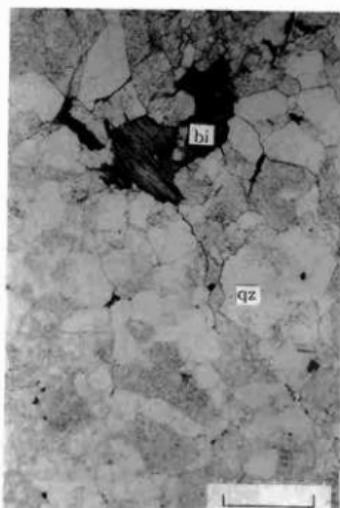
遺構外出土土器(1)



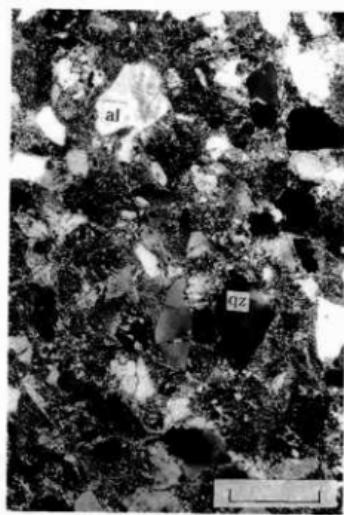
遺構外出土土器(2)



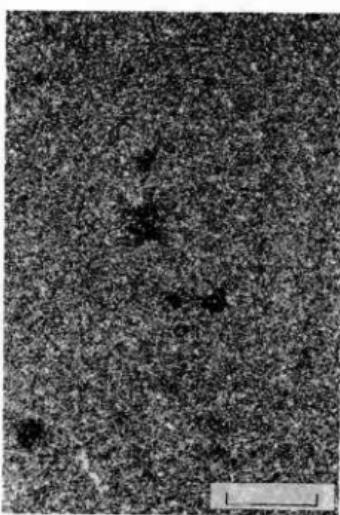
G-2 (下方ポーラーだけ)



G-3 (下方ポーラーだけ)



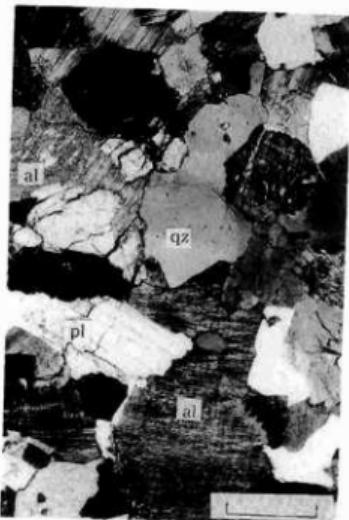
G-4 (直交ポーラー)



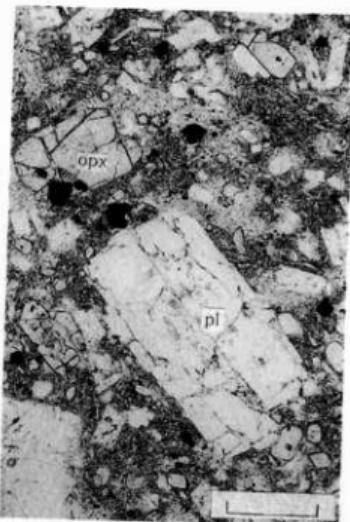
G-5 (下方ポーラーだけ)

Cpxオージャメイト、am角閃石、Bi黒雲母、pl斜長石、alアルカリ長石、qz石英、スケールは0.5mm

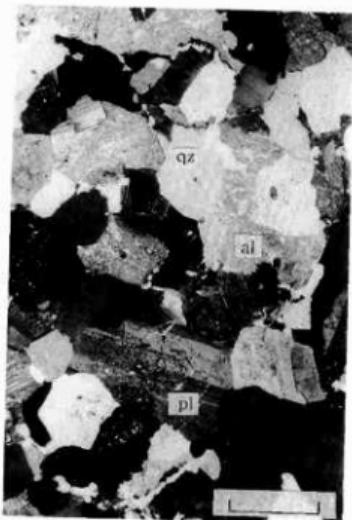
図版18



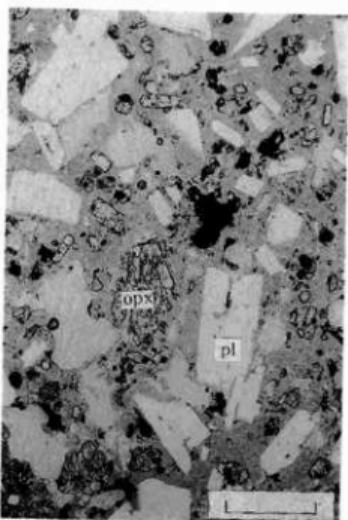
G-7 (直交ポーラー)



G-8 (下方ポーラーだけ)



G-12 (直交ポーラー)



G-13 (下方ポーラーだけ)

O P X 斜方輝石、pl斜長石、alアルカリ長石、qz石英、  
スケールは0.5mm

石材(2)

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第31集

こうそうち  
郷藏地遺跡

—— 塩川ダム建設に伴う発掘調査報告 ——

印刷日 昭和62年3月20日

発行日 昭和62年3月25日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 株式会社南堂印刷所

厚



結